（添付資料１）



最優秀賞
文部科学大臣賞

命と向き合う
山形県南陽市立赤湯中学校
３年　佐藤　充朗

烏帽子山の葉桜を背に、僕は階段に腰を下ろした。あたりはまだ薄暗く、赤湯の町は静かに朝を迎えようとしていた。するとそこへ、「ガーガー」と大きな翼を広げた青鷺が、灰色の空を悠々とはばたいてきた。しかし、彼らは今日殺されてしまう。

５月１７日午前４時半、僕は地区の役員をしている父について烏帽子山に向かった。烏帽子山にはたくさんの鷺が住んでおり、この時期はここで子育てを行っている。しかし、この鷺たちは大きな声で鳴いたり、民家にフンを落としたりと近くに住んでいる人にとっては迷惑な存在となっている。そのため、彼らは「害鳥」とみなされ、年に一度行われる害鳥駆除の主な対象となっている。

今日は、猟友会の人たちが撃ち落とした鷺を集める係になっていた。その仕事はただ鷺を袋に入れるだけでなく、生きたまま落ちてきた鷺を自分の手で殺さなければならない。それがいかに残酷で苦しいことであるかはわかっていた。しかし、この鷺たちの現実と向き合える貴重な機会に、自分の動物に対する考えを深めることができるかもしれないと思った。そして、今日殺されてしまう鷺たちから目を背けたくないという思いから、この害鳥駆除に参加することを決めた。

烏帽子山を北側に進むと、背の高い杉が並ぶ鷺の寝床に着いた。空を見上げると、何羽もの鷺が飛び交っており、その下では猟友会の人たちが刻々と準備を進めていた。あたりには緊張感が走る。

午前５時。猟友会のリーダーの合図で一斉に散弾銃の音が鳴り響いた。空を飛んでいた鷺たちが次々と落ちてくる。この光景は僕にとってとても衝撃的だった。

散弾銃の音が一段落したところで知り合いの人についていき、寝床へ鷺を探しにいった。周りを見渡していると、いきなり散弾銃の音が鳴り、がさがさと木の間から鷺が落ちてきた。そして、その鷺は１匹の泥鰌（どじょう）を吐いた。鷺はまだ生きていて、声をうならせながらもがいていた。弾が翼にしか当たらなかったため、その鷺はもう一度散弾銃で撃たれ、殺された。僕はぼろぼ

ろになった鷺と泥鰌を見て、もしかしたら雛に食べ物を持ってきたのかもしれないと思い、胸が熱くなった。そして、罪なく殺された彼らがかわいそうに思えてしかたがなかった。
　空を見ると、何度も危ない目にあった鷺たちがまた寝床へと戻ってきた。その鷺たちを再び猟友会の人たちが狙うわけだが、自分の身の危険を忘れてまで子育てに熱中している彼らを僕は心の中で応援していた。
　「あいつは白だからだめだな。」
駆除の最中に鷺を狙っていた方の一人が言った。僕はどういう意味か気になって聞いてみた。するとそれは、このあたりには主に青鷺と白鷺が生息していて、そのうち白鷺は生息数が少ないため殺してはいけないことになっているという意味だった。しかし、白鷺は見た目こそ青鷺とは別なものの、生態はよく似ている。つまり、人に及ぼしている害はほぼ同じだということだ。僕は白鷺と青鷺の間に価値観の差を作ってはならないと思った。そして、白鷺だけでなく青鷺にも適切に向き合っていくべきだと思った。
　害鳥駆除も終盤に差しかかるころ、民家の近くの岸に鷺がいるという知らせが入った。そこへ行くと、一羽の鷺がうずくまっていた。僕が慎重に近づくと、
「グワァッ」
と叫んだ。その鷺の首をつかんで持ち上げると、大きく翼を広げて暴れた。僕は、なかなかその鷺の首を折る勇気が出なかったが、
「ごめんね。」
と言って、その鷺の首を折った。すると、あれほど暴れていた鷺の動きが止まった。僕が命を奪ったのだ。僕は正しいことをしたのか悪いことをしたのか分からなかった。あの鷺の顔が頭から離れず、何度も心の中で謝った。
　僕はこの体験を通して、人と動物の共存の難しさを痛感した。民家の人の身になれば、当然鷺を殺してほしいと思う。しかし、もともと人間が自分たちの生活を優先したことで鷺たちの住み家を奪ったのに、今、命まで奪おうとしているのだ。他に繁殖場所を作るなど、人と鷺が共存できる道が他にもあるのではないだろうか。
　今回の体験は、自分の考えの足りなさをも教えてくれた。僕は、人間は自然の一部だと思っている。同じ自然に生きる一つ一つの命の重みを感じ、共存の道を考えていくべきだと強く思った。人間と動物がお互いに心地よく過ごしていくために、僕にどのようなことができるだろうか。それを深く考えていくことが、これからの僕の目標となった。